

農業委員会海外視察

タイのコメ事情

会長 小山久司

11月5日から10日までの6日間の日程で、私たち農業委員会の一行14名は、タイ国に赴き、コメ事情を視察・研修してまいりました。

一昨年の大凶作の際、緊急輸入されたコメは255万tにもものぼり、その内タイ米が75万tを占めました。また、世界のコメの貿易量1,300万tの内、タイは毎年400万t以上ものコメを輸出しています。

日本では、WTO協定の批准により、今年からコメの輸入が始まりました。私たち稲作農家の不安は大きなものがあります。

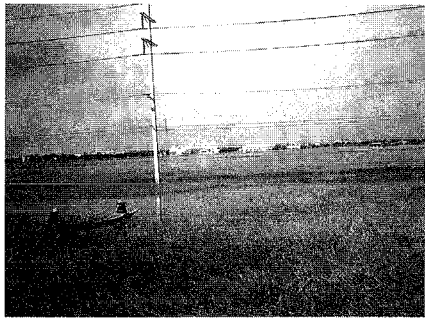
「百聞は一見にしかず」で世界最大のコメ輸出国であるタイ国のコメ事情をこの目で見ようと視察を計画した次第です。

11月5日、成田空港からジェット機に乗ること6時間、タイの首都バンコクへ着きました。現地時間で午後3時半

を過ぎた頃でしたが、気温は30度以上もあり、ムツとする暑さでした。

ここで、少しタイ国の概要を紹介いたしますが、面積は日本の約1.4倍で、山岳地帯が少なく、平坦地が約7割を占めるため、広々とした印象を受けます。

気候は熱帯性気候で、年平均の平均気温は28度、雨の多い雨季（5月～10月）と雨の降らない乾季（11月～4月）が明確に区分されます。人口は約5,700万人、



▲タイの田園風景

首都バンコクは約600万人が住む大都会です。私たちの訪れる1ヶ月前に40年ぶりの大洪水があり、チャオプラヤ川（メナム）の河口デルタ地帯にあるバンコクは、水浸しになったそうです。

日本での洪水は、山から流れ出る巨大な水のエネルギーが大地を崩し、家や橋を破壊するというイメージがありますが、タイのそれは、いつの間にか水が平地を浸し、流れのなまに水が水位が高くなるといった「水が湧く」というイメージだそうです。

この溢れ出る水を除けば、台風や地震などの自然災害がほとんどなく住みよい国であるとのことでした。

さて、研修テーマのコメの話に入ります。現地のガイドや農家から聞いた話や資料、農村や田園風景を見た印象から述べさせていただきます。

水田の基本的な形は、米国や豪州は格別として、日本のように川から水を引くための用水路と圃場の水を排出するための排水路が人口的に整備されているのが一般的なものと今まで思っていました。

タイでは灌漑排水施設を持つ水田は全体のわずか14%しかなく、その他の水田は、自然の降雨に頼る天水田で、雨季に入り田んぼが柔らかくなつた頃に耕起をし、雨季の中旬以降に作付けをし、乾季、水が引いてから収穫をするという、自然に逆らわない農法で稲作が行われています。

タイの稲作のイメージにある二期作が行われているのは水田面積のわずか8%にすぎないそうです。また、肥料製造業の進展が遅れていることにより、化学肥料の使用も一般的には普及しておらず、管理も粗放的なため、生産性が低く、10a当りのモミ収量は全国平均で約200kgのとことです。

栽培される品種も、インデイカ種の長粒米がほとんどであり、雨季作では稲が水没しないように長桿種が栽培されます。日本で見られる短桿の稲は灌漑施設のある圃場で乾季作にのみ作付けが可能になるそうです。

このことは、日本人の好むジャポニカ米を栽培するには灌漑排水施設の整備が必要不



▲タイの農家を訪問し状況を視察

味方村・中之口村・月瀧村三村海外研修事業

ロンドンのハーロー・スクール及びフランス

月瀧村から7人、味方村から7人、中之口村から6人の村民が参加しての初めての三村住民海外研修が、11月2日から7日間の日程で実施されました。

今回の研修テーマは、ロンドンの教育制度とパリ郊外のぶどう栽培等農業事情についてであり、イギリスとフランスの2か国を訪問しました。

まず、ロンドンの教育制度は：イギリスに到着して2日目の

11月3日朝、ロンドンではこの時期、珍しいという晴天に恵まれ、一路、目的地のロンドン郊外のハーロー・スクールへ向け出発しました。

ハーロー・スクールでは、ここで教鞭をとっているスーザンさん（今年、1か月ほど日本に滞在したそうです。）の説明を受けました。

「ハーロー・スクールは、ハーローヒルという丘の上につ（丘全体が学校関係の施設ばかりです。）パブリックスクールです。パブリックスクールは、アメリカでは公立校を意味しますが、イギリスでは逆に私立校のことをいいます。訳としては、公衆



学校とでもいうべきでしょうか。

昔は、お金持ちの子弟は学校教育を受けていましたが、それほど金持ちでない家庭の子どもは、そのような教育を受けることができないので、集団教育で我慢しなければなりません。こうして、集団教育、即ち公衆のための学校教育が始まったのですが、このような教育は近代国家になるはるか以前のことで、当然のこととして公衆学校は公立ではなく私立でありました。このような公衆学校は、時代が経つにつれて歴史のある立派な学校になりましたので、公衆学校、即ちパブリックスクールといえ、歴史のある立派な学校を意味するようになりました。最初に見学したのは、創立当

時の教室です。この教室は、19世紀には、第



四教室の名称で知られるようになりました。また、ここ200年間、生徒が卒業の際に壁に名前を彫るという伝統が培われてきました。今もうかがえる名前としては、劇作家のシェリダン、作家であり、郵便ポストの発案者でもあるトロップ、元首相であり、メトロポリタン警察の創始者でもあるロバート・ピール等ですが、最も著名なのは、戦時中の首相として英国の繁栄を築き上げたと讃えられるウィンストン・チャーチル卿です。その後、絵画や書物をはじめ、陶器や自然史の標本類など、学校が所有している品物が展示されている建物や、第一次大戦、第二次大戦の戦没者の名前が刻まれているウォーメモリアルの建物等を見学しました。（次頁へ）



▲現地の稲作の状況を視察

は貧しさです。住む家は高床式の掘つ建て小屋で、農業機械と言えば耕耘機がようやくある程度です。農作業の殆んどは人力に頼っています。この村の平均耕作面積は約1.5ha程度で、反収の低さを考慮すれば、日本では5反百姓ということになるのかも知れませんが、時代で言えば昭和30年代といったところでしょうか。

この村のジャン・ペンさんという農家の話ですが、息子を大学に出すために持つていた1ha程の水田を売り払ったそうです。貧しさから抜け出そうと、離農する農家が増えていると言っていました。

タイは、就業人口の7割が農民です。近代化が進んでいないタイの農業は、農民の数

の多さでその生産が支えられてきたようです。

私たちが見てきたこと、聞いてきたことは、ほんの一部でしかありませんが、きらびやかな大都市バンコクと貧しい農村部という図式から、タイの農業生産の基盤は非常に脆弱なものであるとの印象を強く受けました。今後ともこの国が安定的なコメ輸出国であり続けるには、農民の所得の向上や生活環境の整備、生産の近代化が図られなければ難しいのではないかと思います。

また、緊急コメ輸入の際は日本で不評を買ったタイ米でしたが、滞在中に三度三度の食事でいただいたタイ米のチャーハンは大変おいしいものでした。これは以外でした。日本でもインデイカ米は十分受け入れられると思います。

しかし、ジャポニカ米について言えば、タイのコメ生産の現状を考えると、日本向けに生産を拡大するとは考えにくいと思います。

まとめませんが、以上で報告を終わりたいと思います。